

## 「出される物を食べ、また飲みなさい」

立教新座中学校・高等学校チャプレン 倉澤 一太郎



その後、主はほかに七十二人を任命し、ご自分が行こうとするすべての町や村に二人ずつ先にお遣わしになった。そして、彼らに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。行きなさい。私があなたがたを遣わすのは、狼の中に小羊を送り込むようなものである。財布も袋も履物も持って行くな。誰にも道で挨拶をするな。どんな家に入っても、まず、『この家に平和があるように』と言いなさい。平和の子がそこにいるなら、あなたがたの願う平和はその人にとどまる。もし、いなければ、その平和はあなたがたに戻って来る。その家に泊まって、そこで出される物を食べ、また飲みなさい。働く者が報酬を受けるのは当然である。家から家へと渡り歩くな。どの町に入っても、迎え入れられたら、差し出される物を食べなさい。そして、その町の病人を癒やし、『神の国はあなたがたに近づいた』と言いなさい。」

(ルカによる福音書 10 章 1-9 節)

5月11日(土)に立教学院創立150周年記念の感謝礼拝が諸聖徒礼拝堂で行われ、ヴァージニア神学校のイアン・マーカム学長が奨励をしてくださいましたが、私は奨励に先立つルカ福音書10章1～9節の聖書日課の朗読を担当しました。ご存じの方も多いと思いますが、この聖書箇所はイエスが72人の弟子たちを派遣されるにあたって、宣教に赴く者が心がけねばならない重要な事を教えられた箇所です。

創立記念の感謝礼拝という特別な場で改めて朗読しますと、主イエスはご自分が行こ

うとするすべての町や村に弟子たちを先にお遣わしになったという1節が、幕末の日本に來られたウィリアムズ主教の姿を想起させられます。5人とも8人とも言われますが、10人に満たない塾生で始められた私塾が150年を経て大学だけでも2万人を超える学生を抱える学校となったことや、4万人以上の信徒が在籍する日本聖公会のことを考えますと、主が「収穫は多い」と予告されたことは真実であったと感じさせられ、主イエスが先に遣わされたウィリアムズ主教と共に働かれた結果なのだ得心させられました。

以前は「財布も袋も履物も持って行くな。誰にも道で挨拶をするな。」とのご命令は随分と無茶な指示だと感じたものですが、懐に余裕があれば好き嫌いで相手を選ぶことができてしまいますが、余裕が無ければ好き嫌いを言っていられなくなります。また二人ずつ組みにされたのも相性や好き嫌いではなく、自分と相手の意見をすり合わせることの積み重ねが大事だと教えられるためであったように思われます。考えてみればウィリアムズ主教も来日に際しては独りでの派遣ではなくジョン・リギンズ師との協働であり、同師が病気のために帰国した後も「働き手」が次々



に送られて来ていますし、日本人の働き手も現れています。弟子たちを宣教のために遣わされた主イエスは、受難と復活の後にご自身が世の終わりまで弟子たちと共におられる聖霊となられ、後に続く働き手たちを導かれたのです。

また私たちがその大きさを見落としがちな指示が「出される物を食べ、また飲みなさい」です。福音書の流れでは弟子たちは近隣の町や村に遣わされるものだと思いますが、当時のユダヤ地方にユダヤ人だけが居住していた訳ではありません。イエスが宣教の拠点とされたカファルナウムでもローマ人やその他の民族が居住しており、イエス自身もティルス・シドン地方へ赴かれてカナン人女性と交わりを持たれるなど、他民族との交流機会は少なくありません。遣わされた弟子たちを受け入れた人が他民族の人であれば、律法食物規定に沿わない食事が提供される場合も出てきます。弟子たちが律法を守ろうとすれば家に招き入れてくれた人との交わりを諦めることにもなりかねず、それはイエスから託された任務の放棄に繋がります。それでは神の福音はすべての民に伝えられることはなく、ユダヤ人の中のみ留まることになったでしょう。律法食物規定はユダヤ人と他の民族を同じ食卓に着かせることを拒む隔ての壁であったと考えますが、それを乗り越えよとのイエスの指示によって福音はユダヤ人から他の民族へ、そして日本へと伝えられて多くの実を結びました。人と人とを隔てる壁を乗り越え、同じ食卓に着いて共に食事を分かち合うことこそが、神が示される平和の姿の具現であるように感じられます。ですが、異なる文化や習慣、価値観を持つ者同士が交わりを持つことは想像を超える面倒や苦勞をすることになるでしょう。私たちの前には律法を格好の大義名分として諦めさせる誘惑が待ち受けていると言えますが、「出される物を食べ、また飲みなさい」のご指示は

「正義」を盾にしての選り好みや諦めを許さないとのイエスの強い意志が、また神が本当に全人類を救おうとされている御心とが読み取れます。

私達も先人たちが示してくれた、神の召しに応じて自己基準の正義を他者との交わりを拒絶する理由とはせずに、乗り越えて交わりのために挑戦し続けた心の強さを模範として後に続きたく思います。

